
月下美人

亨珈

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下美人

【Nコード】

N4974T

【作者名】

亨珈

【あらすじ】

パーティーが解散して、シャー・スリムは個人で傭兵稼業を楽しんでいた。レベルが高いため都市ではすぐに顔がばれてしまう。辺境の町を訪れてのんびりしていると何とも胡散臭い依頼が舞い込んできたのだった。

連載にしていますが文章量は短編相当です。

1 (前書き)

ソードワールドの世界でオリキャラが動いている話です。リプレイではなくキャラクターのプレイヤーが作った原案を元に執筆します。

トレードマークであるスカイブルーの鎧を脱ぎ、少し遅めの夕食を取るためにシャー・スリムが選んだ店は《雪山亭》。

メニューは他所と比べても豊富とは言えないが、彼の口に合っている。そして何より、ウワバミのように浴びるほど毎日酒を飲む彼にとっては、ここ雪山亭に常備されている火酒はことのほか魅力的であった。

人々の喧騒も心地よく、戦士のくせに商人でもある彼は、その中から何か儲けになるようなネタを拾うことも出来れば一石何鳥にもなる。

とまあ、ここまでは冒険者としての建前。

今日の目当ては、実のところ、魅力的なヒップを振りながら給仕している栗毛の娘であった。

一つ前の季節まで共に冒険をしていた仲間内には、森の妖精族エルフ、そして人からもエルフからも除け者にされる存在のハーフ・エルフの女性がいた。

二人とも実に魅力的な存在ではあったが、守ってやらねばという言葉は保護欲には駆られるのだが、周りに噂されるような性欲はもてないでいた。

どうやら自分の好みは、もっと肉感的で出るところが出て、くびれのはっきりしているような、まあ一般的な男性が好むタイプらしい。

今更ながらに、シャー・スリムは思った。

左サイドだけ長めに伸ばしている前髪の奥の濃茶の瞳には給仕娘が映っているが、脳裏に浮かぶのは懐かしいメンバーたちの姿である。

右手で酒瓶を傾けながら、やや鬱陶しげに彼は左手でその茶色の髪をかき上げた。

そして彼女たちへの遠慮と、敬虔なファリス信徒の騎士、ドワーフ族きつての美貌の持ち主であるらしいがただの茶飲み爺にみえなくもないマイリー神官からの説教も避けたかったので、これでもかなり我慢していたのだ。

情報収集のために娼館に行くという目的があるときでさえ、女性陣の非難のまなざしは厳しいものであった。

自分たちは率先して行かないが、別に止めもしないよ。というスタンスで放っておいてくれたのは、自画自賛を絵に描いたような自称有能なソーサラーと、非力だが有事には拷問も辞さない童顔のシューくらいである。

彼らも今頃は、何処かの空の下で夕食を取っているだろうか。

冒険者育成のための学院を建てるという目標は出来たものの、こうしてたまには一人になって冒険をする時期がある。

賑やかなオランの街を離れ、少し田舎の町で自分の顔を知らない人々の中で過ごしたい。そんなところだろうか。

シャーは自分なりに心境を分析しながら、火酒の杯を重ねていた。チップを豊満な乳房の間に押し込みながらようやく目当ての娘の足がこちらを向いたとき、

「おい！シャー・スリム、お客さんだよ」

中年男の野太い声が店内に響いた。

冒険者は皆、この声を無視できない。

声の主はこの店のマスターである。ここで仕事の依頼を仲介してもらっている以上、冒険者は公認レベルに関わらず、従わねばたちまちおまんまの食い上げである。

シャーはもう一度未練がましい視線を女に送ってから、席を立ちカウンターに向かった。

「ある人物の護衛を頼みたい」

一見で、良い所の執事と見て取れる初老の男性が言った。

シャー・スリムの仕事は《冒険》である。

田舎の小さな村や集落にやってくるモンスターを退治したり、善良な民間人には口が裂けても言えない様な裏の世界のヤバイ仕事を請け負ったり、暗黒神の熱狂的な信者たちから、生贄の美しい（ここが最も重要なポイントである）女性を救出したり、今回のような要人（もしくはその真逆の立場の人）の警護をしたりと・・・まあ要は何でも屋なのだが、依頼が何もないときは、気の合うメンバーと共に（これをパーティーと呼ぶ）遺跡発掘や宝探しの旅をしている。

実に波乱万丈な人生だが、口の悪い連中に言わせれば「進んで厄介ごとを引き受ける奇特な戦闘マニア」ということになるらしい。

ほぼ事実なので反論する気にはならない。

「というわけなんだ。引き受けてみないかね？」

仕事の仲介をしてきているここ雪山亭のマスターが、やけに愛想良く説明してくれた。

このように、仕事の依頼者との仲介をしてくれる旅籠を 冒険者の宿 と呼んでおり、先程も述べたように駆け出しのペーペーの冒険者であれレベルの高いシャー・スリムのような者であれ、ないがしろには出来ないというわけである。

「いくらだい？」

頭の中で算盤をはじく用意をしながら問うと、

「引き受けるのか？」

逆に問われた。いくら仲介者がいるとはいえ、仕事の中身も聞かずにはいはいと安請け合いするほどシャー・スリムは世間知らずではない。

「詳しい内容と、金額次第だな。俺の腕はそんなに安かあねえぜ」

まんざら嘯いているわけでもなく、ニヤリと口の端に笑みを浮かべて言った。

若く見えるし、実際若いのだが、こう見えてもシャー・スリムが踏んだ修羅場の数は同じ年頃の冒険者たちと比べたら何倍にもなる。大きな町では歩いているだけで素性が知れてしまうような有名人だ。

だが、そういったしがらみなしで純粹に個人で仕事を楽しみたいがために今回のような辺境の小さな町に来ているシャーは、敢えて自分の素性は語らない。

報酬として示された金額は、シャーの自尊心を満たすに足るものであった。逆を言えば、見た目で判断する限りでは、相手からは破格の報酬であるはずだ。

どうも裏がありそうな仕事である。

しかも詳しい内容はここでは話せないという。

屋敷について来い、と命令口調な執事にカチンときながらも、従うことにした。

「まあ待てや。まだボトルが1本残つとる」

素直に今の気持ちを告げると、執事の頬が引きつるのが判った。どうも忍耐力に乏しい男らしい。

「・・・早くしろ」

唸るように言った次の瞬間には、シャーは空けたばかりのボトルを1本飲み干していた。

別に相手を思いやったわけではなく、これが彼の酒の飲み方なのだ。

「おやじ、もう1本くれ」

足元のザックを拾いながら言い、食事代と共に代金を支払った。追加の酒は、道々飲むつもりだった。

「行くぞ」

言葉少なに店を出て行こうとする執事の顔は苦りきっていた。

飲み始めた頃はまだ夕日に照らされ赤く染まっていた小さな町は、いつの間にか闇に包まれていた。闇の精霊シェイドたちの時間である。高レベルの精霊魔法使いならば、屋敷の壁に掛かっているランタンや松明の周りで楽しげに舞っている火精の姿も見えていることだろう。

お世辞にも綺麗とは言えない狭い裏通りを抜け、所々レンガで舗装されたでこぼこする大通りを横切り林を抜けて、月明かりにうつすらと浮かび上がる古い大きな屋敷に辿り着いた。

道すがらのシャー・スリムのくだらない話は聞きたくないとばかりに、頑として執事は口を開かなかった。シャーの背中 of ザツクの中で、ガチャガチャと鳴るプレート・メールの音がBGM代わりだった。

黒塗りの大きな門は執事と同じようにしっかりと口を閉ざしたまま訪問者をはねつける威厳を漂わせている。その横をぐるりと迂回して、二人は通用口から屋敷内へと足を踏み入れた。

いくつもの扉が並ぶ細い通路を抜け、ようやく玄関ホールわきの客間らしき部屋に通される。

途中に虎を象った紋章付きの家具があるのを、シャーは見逃さなかった。

大きなマントルピースを備えたなかなか豪華な客間である。部屋には先人が居り、案内の執事はさつさと姿を消してしまった。

ざつと値踏みしても数千ガメルは下らないと見て取れる高級な家具たちに囲まれ、ソファに深々と腰掛けて待っていたらしい男性は、座るように促した。

遠慮する謂れのないシャーは、ザツクを足元に置き浅く腰を下ろした。

「さて」

コトリ、とからっぽになったボトルを、無遠慮に目の前のテーブル

ルに置き、シャーは仕事の話に入った。

「具体的な依頼内容を聞きましょうか」

アルコールは入っけていても、頭は冴えているままだ。冷静な眼差しで、眼前の男を観察する。

年の頃は50代前半だろう。白髪交じりの黒髪はきつちりと撫で付けられており、やや細身の体と同じく細い目が、その男に神経質そうな印象を与えている。

屋敷の様子や男の身なりからして、貴族らしく、シャーは何処かに情報が埋もれていないかと先程目にした紋章を記憶から検索している途中だった。

今のところ有効な情報は自分の中から見つけ出せていない。

「急ぎの仕事だ。私の娘を、デランの森までガードしてくれ」

「そりやまた何故？これほどの屋敷を構える財力があるんだ、俺を雇うよりもお抱えのガードを使えばよいだろうに」

「……余計な詮索はするな」

男の眉がぴくりと吊りあがった。

「お前は言われた通りにすれば良いのだ!!」

「報酬を倍にするか？」

声を荒げてからすぐに「しまった」という顔をした男に、シャーは間髪入れずに要求した。

「なに!!？」

男はやや面食らったようだ。

「簡単なことだ。俺があなたに余計なことを訊かず、他の人間にもしゃべらない。つまり口止め料上乘せてことだな」

ぐっと言葉に詰まる男。

「どうせやばいこと絡みなんだろ？」

にやりと人の悪そうな笑みを意図的に浮かべ、シャーは膝の上で両手の指を組んだ。

「よかるう……」

意外とあっさり承諾されて、内心シャーの方が面食らった。勿論

それを顔には出さないが。

通常、個人のガード依頼には守秘義務も含まれている。

請けた仕事の内容をぺらぺらしゃべるようでは、信用度ゼロ、自分から敵を作って回っているようなものだ。

それなのにこうも簡単に承諾するとは、どうやらこの仕事、かなり危険なものようだ。

「全額前払いで、だ」

付け足した言葉にも、男はあっさりと頷いた。

「くっ、人の足元を見おつて……」

「……超危険な仕事に決定。

」で。出発はいつだい？」

気を引き締めなおして尋ねたシャーに、男は陰湿な笑みを浮かべた。

今まで自分に向けられた無礼な態度と言葉にようやく意趣返し出来るといったところか。

「今すぐに、だ」

館に入ったときは別の通路を抜け、裏庭らしきところに辿り着いた。

案内役は、商談が終わるのを隣室で待ち構えていたらしき執事だったが、庭に出た途端にまた何処かへと姿を消してしまった。

シャー・スリムの手には、金貨の入った皮袋が残されたが、中身を確認することもなくそれはザツクの中に放り込まれてしまった。商人たるもの、手に取った重さだけで大体の金額は判るというものだ。それに全額前渡しという条件で数枚の金貨をケチるはずもない。これからの仕事の士気に大いに関わる。

待つほどのこともなく、別の出入り口から女性が現れた。

思わず口笛を吹きそうになったほど、実にシャーの好みの風貌だった。

あの父親だから全く期待していなかったのだが、それは良い方に裏切られたらしい。

「よろしく願います」

軽くお辞儀したその女性は、メイラルフェイと名乗った。

月光が似合う儂げな笑顔だが、生気が溢れている。すっきりと整った顔立ちは、こんな田舎町では目だって仕方ないだろうと思われる。それでいて年相応な可憐さを兼ね備えている。

あの親父の奥方にも会ってみたいもんだ。

別段年上好みなわけではないが、彼女の母親ならばすこぶるつきの美人であろう。

「いえいえ、美しいお嬢さん。こちらこそよろしく願います」

執事にも雇い主にも使わなかった丁寧な口調と笑顔で応対する。やはり仕事はこうでなくては！

護衛の対象が美しい女性だと、シャーはとても優しくなるのだ。

「ところで、お供の方はいらっしやらないので？」

どんな裏事情があるにせよ、こんなか弱い女性を一人で旅に出すなど通常では考えられない。大金で雇ったとはいえ、護衛が初顔合わせの冒険者一人だけとは。荷物持ちの召し使いくらいいても良さそうなものである。

「ええ……出来るだけ隠密に行動しなければならないので……」

そう答えるメイラルフェイの顔は俯きがちで、何処か寂しそうだつた。

言外にそれ以上の追求は受け付けない響きを含んでいたので、シャーは口をつぐんだ。色々と推測はしたが。

デランの森までは、馬でも一週間は掛かる道のりである。

それだけあれば、徐々に親しくなつて打ち明けてくれるのを待つのも良いし、それ以上に男と女の関係を持つための努力は惜しまないつもりだ。

前のパーティーメンバーが、今の彼の心中を知れば、鉄扇ではいたりストーンブラストが飛んできたりナイトメアで呪われるのは必至のいただけない考えであろうが、今この場にいないものはどうしようもない。

個人の仕事だからこそ色事を絡めて楽しみたいと、小躍りしたい気分のシャーだったが。

勿論この先には金額に見合った厄介ごとが待ち構えているのであった。

「待ちな、兄ちゃんたち」

二日目の昼下がり、お約束通りに、盗賊らしき連中が現れた。

郊外に出て一刻ほど進んだ頃、薄暗い森に差し掛かったところで

ある。いかにも柄の悪い下卑た笑いを浮かべ、趣味の悪い毛皮の鎧を纏っていた。

「ふーん、野党か」

シャーは別段慌てた風もなく、鼻で笑った。

その様子には七人の盗賊たちは怒気も顕わにダンビラを構えた。その中でも少し上等な装飾品をつけた男が、けっけっけ、と笑い声を上げて命じた。

「お前等には死んでもらうぜ」

どうやらこのグループのリーダーらしい。

自分の馬でメイラルフェイを背後にかばいながら、けしかけられて徒歩で向かってくる男たちを馬上から迎え撃つ体勢のシャー・スリム。

ズシャ。肉と骨の碎ける音がし、先頭の男が一撃で地に沈んだ。

盗賊たちにもメイラルフェイにも、抜く手は見えなかったが、シャーの腰に下げられていた幅広の直刀は鞘から出てしつかりと右手に握られていた。

破壊力から察するに、相当な重量がありそうだが、その細身に似つかわしくない腕力でもって片手で使いこなしているのだ。

「けっ。よわっちーくせに粹がるんじゃないぜ！」

わざとらしく丸つきり馬鹿にした声を挙げると、残りの連中がむきになって襲い掛かってきた。

だが、はつきりいつてシャーの敵ではなかった。

そのまま片手で相手をし、足だけで馬を操りながら、空いているほうの手で酒袋から火酒を飲んでいる。

実はこのシャー・スリムの操る剣は、バツカス・ソードという魔法剣なのだ。持ち主が飲めば飲むほど威力を発揮するのだが、下戸や並みの人間には到底使いこなすことは出来ないだろう。

そういったハンデは抜きにしても、やはり格下の敵であることは否めないが。

ふと、シャーはリーダーの後ろから更に一人現れ、弓を構えているのに気付いた。

板金鎧を着ている自分は良いとして、メイラルフェイが怪我をするかもしれないと不安がよぎる。瞬時に、盗賊たちをまとめて片付けようと判断したそのとき、弓を構えていた男が悲鳴と共に倒れた。視界にちらりと細身の剣を携えた男が映り、シャーは最後の一人を叩きのめしてから男を注視した。

まだ、敵か味方が判らない。

背後でメイラルフェイが馬から下りる音がした。

「ライフ！」

心なしか嬉しそうな声で、男に向けて呼ばわった。

戦闘中ずつと青ざめたまま馬上で震えていた名残か、本当なら駆け出したいのを堪えているような様子だった。

「やあ、メイ。大丈夫だったかい？」

ライフと呼ばれた青年は、優しげに彼女に微笑みかけながら二人に近付いてきた。

皮鎧に身を包み、赤毛に近い金髪から覗く耳先は少し尖っている。森のエルフと人間の間に生まれたハーフ・エルフであろう。

必ずではないがエルフ族は男性でも髪を長く伸ばす習慣があるので、短く整えているこのライフは人間の集落で育ったのかもしれない。

「ええ」

喜びに輝くメイラルフェイの顔は、血の気を取り戻して輝くばかりに美しい。

「大丈夫だ。俺が護っていたからな」

シャーは些か憮然として口を挟んだ。

此処までの道程で初めて見る彼女の笑顔が、突然現れたこの男のせいであるのが気に食わないのだろう。

「誰なんだい？この男は」

ライフの方も訝しげにシャーを見やりながら、メイラルフェイに

問うた。

「私の護衛よ。シャー・スリムっていう名前なの」

「へえ」

ライフとシャーは、お互いに無遠慮な視線で互いを観察しあつた。

「お嬢さん、このハーフ・エルフは誰なんですか？」

差別的な言い回しだが、律儀にメイラルフェイは答えた。

「私の幼馴染み。名前はライフって言うの」

やや早口になりながらの簡単な説明。彼女の視線の先には、ライフの細面の顔。とくれば、二人の間にそれ以上の感情があることは容易に察せられた。

残念だが、自分の入り込む余地はなさそうだと判断して、シャーはさっさととげとげした気配を収めた。ここは馬に蹴られる前に手を引いたほうが良さそうである。

何より美しい女性を一番に考えるシャーだからこそ、無意味に横槍は入れないのだった。

わざと生かしておいた盗賊の一人を尋問してみたが、結局何も知らない様子だった。

ただ、良いカモが来ると同業者に教えられて待つていたのだという。冒険者の勘では嘘はついていなさそうだったが・・・。

こういうときにソーサラーの連れがいないのは痛手だった。ギアスの一発で事足りるのである。

そういえば・・・俺からトランスファーマENTALパワーで精神力を分けてもらってまでことごとくギアスの呪文に失敗した「自称有能なソーサラー」がいたなあ。その後押しかけ女房が唱えた呪文は一発で効いたのに！

シャーの脳裏を懐かしい思い出がよぎった。

街まで連れて行けば賞金くらいは出るかもしれないが、今はそうしている余裕もなく、三人は生き残った盗賊をもう一度気絶させてから念入りに縄を掛けてその場を後にした。

ライフも森に隠しておいた自分の馬に乗り、夜までは早足で進んだ。

近くに街がないので野営することになり、街道から少しだけ木立の中に入り、馬を繋いでから荷を降ろした。

「夕食にしよう」

ザックはごく普通のサイズのものだったが、シャーはそこから食料に飲み物、火打石などのセットにランタン、鍋に毛布、と次々と取り出した。その後テントまで取り出したところで、ライフから呆れた声が漏れた。

「一体どのくらい入っているんだい、そのザックには」

作業をしながらシャーはにやりと笑った。

「こいつは魔法のザックなのさ。その気になれば馬でも入る」

元々このザックには、現在シャーが身に着けている魔法の鎧も入

つていたのだ。そこまでばらしはしないが、それなりの能力を持つものが見たら、これだけのマジックアイテムを取得している男の力量も自ずと知れるというものだ。あるいは、金と地位に物を言わせているただの金持ちのボンボンと見られるかもしれないが。

「しかし・・・どうしたもんかね」

手際よく干し肉を切り分け、野菜を煮込んだスープを作りながらシャーは呟いた。

野外活動をしたことのないメイラルフェイとライフは、おとなしく腰を下ろしたまま暗い顔をして俯いている。

「すいません。事情は話せないんです」

俯いたままメイラルフェイが言った。

「別に、話せないならいいんですよ。私は、あなたのような美しい人の頼みなら無条件で従います」

いつも通りにぬけぬけと抜かすシャーに、ライフは複雑な表情だった。

これくらいのちょっとした意地悪は大目に見てくれよ。

シャーは微笑を浮かべたまま、二人に給仕した。

月は中天に差し掛かっているはずだが、夕方から出てきた厚い雲に覆われてその姿は見えない。

メイラルフェイとライフはテントの中で横になっているが、眠れているかどうかは定かではない。

野宿に厳しい季節ではないが、マントも被ることなくシャーはちろちろと燃える焚き火の傍に寝転がっていた。勿論愛剣はいつでも抜ける位置に置いてある。

何かが来る。

月明かりもなく、他に人気もない屋外である。メイラルフェイを狙っている連中にとつては絶好の機会であるはずだ。

案の定、シャーは近付いてくる者の気配を感じ取った。

数年の冒険者稼業の中で培われた勘である。軽く百を越す修羅場をくぐってきた中で養われたレンジャー能力が、迫り来る暗殺者の影を正確に捉えた。

一人・・・二人・・・四人か。気配が消しきれていないな、雑魚か・・・。

一撃で葬れる範囲まで、自分では気配を消して忍び寄っていると信じて暗殺者が近付いてきたところで、シャーは飛び起きて切り掛かった。

ぐしゃりと音を立てて体が妙な風に変形し、暗殺者の一人は絶命した。

流星は闇の仕事を生業とするものというべきか、残る男たちにも取り乱した様子は見られない。内心驚いて尻込みしているかもしれないが。

「けっ、もう少し骨のあるヤツを寄越しやがれてんだ。こんな雑魚じゃお休み前の運動にもならねえぜ」

シャーの悪態にも心を乱される様子はなく、黒尽くめの暗殺者たちは無言で打ちかかっていった。

しかし、やはり敵ではなかった。数合剣を交えただけで、二人が同じように叩き伏せられた。

「残り一人！」

高らかに叫んだとき、テントの方で何か気配がした。

「しまった！」

舌打ちをしたシャーの意識は半分以上テントに向いている。

その隙を逃すはずもなく、暗殺者は小刀で懐に切り込んだ。いや、鎧の継ぎ目を狙い、刺しに行ったと言う方が正しいか。

後悔しながらもシャーはその攻撃を難なくかわし、男を渾身の力で殴り倒す。

吹っ飛んでいった男には見向きもせずに、シャーはテントに駆け戻った。

テントでは戦いの真っ最中だった。ライフが、敵の攻撃を受け流しながら精霊魔法を使っている。昼間聞いた感じでは、かなりの腕の持ち主のようだったが、必要最小限の動作で敵からの攻撃をかわしつつ呪文を唱える余裕がある辺り、思ったとおりの腕前らしい。

三人いた暗殺者の内二人に、ライフの手の平から発生した光の弾が一直線に襲い掛かる。それは衝撃波を発しながら敵にダメージを与えた。

残り一人がメイラルフェイに向かうが、意外にも彼女は機敏に避けていた。

もっとも顔は恐怖に引きつりランタンの微かな明かりでもそれと判るほど蒼ざめていたが、それでもシャーは彼女を美しいと思った。状況を把握しながらも別の気配を察し、シャーは足を止めた。どうも戦況は更に悪化するようだ。沢山の悪意ある存在がこちらに向かっていているのが判る。

じきに悪意の源が姿を現した。山賊らしい。昼間の連中と似たような格好をしているので、シャーにとっては雑魚扱いだが・・・ざっと数えても二ダース。数が多すぎる。

3 (後書き)

シャー 絶体絶命のピンチです。
一人なら切り抜けられるんだけど・・・

シャー一人でならどうとでも切り抜けられるが、メイラルフェイをかばいつつ全員を倒すとなると、かなりの覚悟が必要だろう。

勿論、散り散りに逃げるとか、メイラルフェイだけ逃がすとかいう選択肢もありえない。それでは護衛にならない。

「昼間はよくも子分を可愛がってくれたな、たっぷり礼をしてやるぜ！！」

その台詞からも判るように、やはり昼間の連中の仲間というか親分だったようだ。復讐に来たのは仕方ないが、それにしてもタイミングが悪すぎる。まるで暗殺者との連係プレイのようだ。

「おい！こいつらを頼む」

いつの間にか傍まで来ていたライフに、シャーは暗殺者二人を押し付けられる形となった。

否応なしにシャーと暗殺者二人の切り合いが始まったが、攻撃は一方的にこちらから当たるだけだった。

「風の精霊たちよ！」

ライフが精霊語で呪文を唱えた。

「その王の名において命ず。嵐となりて敵を打ち倒せ！」

ただちに契約は果たされ、木立の中を突風が吹き荒れた。局地的な嵐によって山賊たちは次々と切り裂かれ、地面に倒れ伏していく。しかし、それでも残った連中は攻撃を諦める様子はない。なんてまとまりがあつて根性のある山賊なのかと感心してしまう。

半数ほどが嵐に打ち勝ち、シャーとライフの方に元気に向かってきた。既に暗殺者二人を片付けていたシャーは、バツカスソードを握り直してそちらに対峙した。

その時、視界の隅に最後の暗殺者の攻撃を必至にかわしているメイラルフェイの姿が映った。

新しい敵の登場ですっかり忘れてしまっていた。

このままでは攻撃の術がない彼女が傷を負うのは時間の問題だが、前方の山賊たちが邪魔ですぐには助けに行けない。

力任せに山賊たちを剣で切り払いながら少しでも彼女の方に近付こうとしていると、鋭い雄叫びが上がった。

その異様な雰囲気、場の空気が凍りつき、敵も味方も攻撃の手が止まり、雄叫びの発生地点に目を向けていた。

視線の先にいたのはメイラルフェイだった。

一瞬シャーは、メイラルフェイが重傷を負ったのかと冷や汗が噴き出した。

メイラルフェイは、地面に両手をついて四つん這いになっていた。全員に、彼女の体が奇妙に歪み、やや大きくなったように見えた。気のせいではない。確かに大きくなっていて、刻々と変化は続いていた。

確かこれは・・・。

シャーは記憶の糸を手繰った。

その間にもメイラルフェイの変身は進んでいく。衣類が破れ陶磁器のように滑らかな肌が夜気にさらされたかと思うと、次の瞬間には白銀の体毛に覆われていた。

「ライカンスロープ・・・！」

それが何を意味するものかすっかり思い出して、シャーは思わず声に出していた。

視線の先には、通常の虎よりも一回り小型の美しい白虎が悠然と立っていた。変身の完了を意味するのか、高らかな雄叫びが上がる。先程の風の魔法の影響か、いつの間にか頭上を覆っていた雲が切れ、その美しい魔獣は全身に月の光を浴びて輝いていた。

皆が見惚れて立ち尽くしていると、遠くからも咆哮が聞こえてき

た。白虎の雄叫びに答えたかのような。

シャーは慌てて身構え、何処から攻撃されてもよいように意識を集中した。

ライカンスロープ：人獣には、特殊な能力がある。その体には銀か魔法の掛かった武器の攻撃しか効果がない。魔法攻撃も有効だが、今此処で呪文を唱えられるのはライフだけだ。そして彼らは……

「うわぁ！」

山賊たちの悲鳴が上がった。

近くにそんなにいたのが不思議だが、十数頭の虎がまとめて襲い掛かっていったのだ。

そう、ライカンスロープには、同種の獣を自由に操ることが出来るのである。瞬く間に山賊たちはボロボロの肉塊へと姿を変えていった。

そして残ったのはライフとシャー・スリムだけとなった。

虎たちは二人にも容赦なく牙を向けた。

「やめるんだメイ！」

ライフは必死に虎たちの攻撃をかわしながら、メイラルフェイに声を掛けた。

「無駄だ！獣人化したライカンスロープに理性はない！」

シャーはそう叫びながらも、手甲で虎を殴り飛ばしていく。

ライフもそんなことくらい判っているだろうが、それでも健気にメイラルフェイを呼び続けた。

「メイ、メイ！やめてくれ、いつものお前に戻ってくれ！」

悲痛な叫びが、森に響き渡った。

シャーの所有するバックス・ソードならば、魔法剣なので当然ライカンスロープにも攻撃が効く。

それ以前に素手だろうが普通の虎たちくらい倒すのはわけないのであるが、命を奪うには忍びなく、戦えなくなる程度にダメージを与えるつもりだった。

しかし本当なら護衛すべきメイラルフェイに傷など負わせたくないのである。

戦いながらも逡巡し、はっと閃いた。

「おい、ライフお前の魔法で彼女を眠らせろ！」

これなら命に別状もないし、無傷で場を収めることが出来る。

それを聞いたライフは、ハッと目を見開いた。

そうかその手があつたかという呟きの後には即座に呪文の詠唱に入る。その間だけでも凌げるように、シャーはライフの近くの虎たちも牽制した。

「眠りの精霊よ、汝らの腕に抱きて彼の者を夢の世界に誘え」

果たして、変身により精神抵抗力も人型のときより落ちているのか、白虎は少しふらつき、抗う様子を見せながらもじきにどうと倒れこんだ。

どうやら呪文が効いたらしく、野生の虎たちは波が引くように去っていく。

「ふう。助かった・・・」

シャーは大きく溜息をつき、剣を腰に戻した。

女性を痛めつけるのは本意ではない。心の底から安堵し、傍らにいたはずのライフに目をやると、地面に横たわっていた。

魔法の連発で精神力が尽きたのだろう。気を失っている。

やれやれと思いつつも、細身のハーフェルフを抱え上げると、テントの残骸に運んだ。戦闘でばらばらに吹き飛んでいるが、地面に直接寝かせるよりはいくらかましだろう。

同じように・・・といっても抱き上げるときの手つきは比べるべくもないほど優しいにメイラルフェイも運び、並んで寝かせた。白虎でも女性に変わりはない。

起こさないようにそつと毛布を掛けると、わざと手加減して気絶させておいた暗殺者を一人縄でしっかりと縛り、今にも消え落ちそうになっていた焚き火に木をくべてから、木にもたれたまま浅い睡眠をとったのだった。

翌朝、二人は生き残りの暗殺者を尋問していた。

精霊魔法の効果がまだ続いているのと、変身で体力を消耗しているのだから、メイラルフェイは未だ虎の姿のまま寝息を立てている。但し、尋問というには些か妙な感じだった。

残した暗殺者は偶然にも女性だった。無意識下で男女の選別をしていた可能性もゼロとは言い切れない、いつものメンバーなら頷くところだ。

その女性は心を許した様子でライフと談笑している。

何しろ暗殺者は山賊と違い簡単に口を割ると思えず、自害されても困るので、ライフに魅了の魔法を掛けてもらったのだ。睡眠で精神力の回復したライフは、苦もなくチャームに成功し、今彼女は仲間と信じる質問者にすらすると答えているのだった。

「それで、誰が僕たちのところに君たちを寄越したんだい？ちゃんと御礼をしなくてはいけないからね」

意図的に軽い調子で尋ねる手腕もなかなかのものだ。

「ええとね、ゾライアっていう人だよ」

ハートマークすら見えそうなほどうつとりした瞳で見つめられながら、ライフとそして少し離れたところに座って会話を聞いていたシャー・スリムは、驚愕に身を震わせた。

もう必要な情報は取り終えたので、今度は魔法で眠らせてからまたしっかりと縛っておいた。その作業を終えてから、シャーはライフに物問いた気な視線を向けた。

「……………うすうす、感付いてはいたんだ……。彼女は特異体質でね……。彼女の家に呪いが掛かっているらしいんだ」

ぼつりぼつりと、ライフは語り始めた。眉をひそめ、それでもいたわるようにいとおしむように、白虎のままのメイラルフェイを見

つめている。

「彼女は満月期になると、白虎に獣人化するんだ。つい最近からだけれどね。確か、彼女の十六の誕生日を過ぎてからだったかな・・・。

彼女の家では、幼少時にその呪われた体になっていることが判ると、事故死ということにして密やかに始末してしまうんだ。

けれど・・・彼女はもう結婚相手も決まっていた。さる貴族とね。下手な殺し方をしたら、相手方に不審がられてこの呪いの事が表沙汰になるかもしれない。

そう考えたのさ、あいつは。

あいつは、娘の命より家の名誉の方が大切なのさ。ゾライア家の名誉がね」

静かに耳を傾けていたシャーが口を挟んだ。

「・・・わからないな。でも、こうして結局殺そうとしたじゃないか」

ライフは苦笑して視線をシャーに移した。

「あいつはね、メイを駆け落ちしたように見せかけたのさ」

シャーは鳩が豆鉄砲を食らったような顔になる。

なんだと！？てことは、俺が駆け落ちの相手か！

そいつは目が高い・・・いやいや。先に言ってくれたら本当に駆け落ちしたかも・・・もとい。大金を積んだのはそんな後ろめたいところがあつたからか。

「相手の貴族のボンボンが、自分の演技に酔うタイプでね。それでまた物凄く女性に優しいんだ」

あんたみたいだね、という風に青い瞳が訴えている。

「愛する人が死んだのならともかく、幸せな相思相愛の駆け落ちをしたなら、納得するタイプなのさ」

確かに、美しい女性が幸せになることが優先されるべきだ。腕組

みしてうんうんと頷き、

「偽装した駆け落ち。実は本当に相手がいた・・・か」
意趣返しににやりと笑う。

ライフは尖った耳の先まで真っ赤になって下を向いてしまった。

「どう言って自分の娘を連れ出したんだ？」

「彼女には、デランの森に呪いを解く鍵があると言っていたらしい・・・」

「酷い事をするやつだ・・・」

ふつつつと込みあげて来る怒りの感情は二人の男に共通するものだ。

実の娘を、家の体面を護るためだけに犠牲にするとは。全く信じ難い人種である。

「どうする気だ？」

シャーはそつとライフに尋ねた。

「分からない・・・本音を言うと、あいつを殺してやりたいが、それでもメイの父親だ。メイが悲しむ姿は見たくない。それに彼女を放つてもおけない」

ライフの魔法力があれば、事実として殺すだけならたやすいことだろう。しかし、それでは駄目なのだ。

苦悩している様子はシャーにも判った。

「よし、メイさんのことは任せた。これからまた暗殺者が現れるかもしれないから、良い隠れ場所を紹介してやる」

勉強のために人の世に交わり共に冒険をしてきたエルフが、今は故郷に戻っているはずだ。その森ならば、ハーフエルフでも匿ってくれるだろう。

「シャー・スリムの名を出せば、歓迎してくれるはずだ。取り敢えずこれだけ持って行け」

自分のザックから、受け取った報酬の半分と当座の食料、それからメイラルフェイの荷物を引っ張り出して押し付けるように渡した。住処さえあれば、遊んでいてもしばらくは暮らさに困らないはずだ。

「それから、彼女の呪いな。もしかしたら何か手がかりが手に入るかもしれない。

落ち着いたらオランのマイリー神殿に行き、最高神官のドワーフを訪ねてみる。俺の名前を出せばすぐに会ってくれるから」

どう反応してよいか判らないといった顔で目を白黒させているライフに向かって一方的に告げると、シャーはさつさと荷物を載せて馬に跨った。

成り行き上、先程縄を打った暗殺者も乗せて近くの町役場に放り捨てていくことにする。

ゆつくりと別れを惜しむような間柄でもない。

シャーは、ライフが感謝をこめて頷くのを確認したのかしなかったのか、さつさと馬の腹を蹴った。

それからしばらく、表の世界ではただのぐうたらな飲兵衛の商人戦士の姿しか見られなかったらしい……………。

落ち葉の舞う季節になった。

鎧姿ではなく軽装で、シャーはオランの酒場にいた。例によって火酒のボトルが数本目の前に転がっている。一応ジョッキに注いでいるとはいうものの、ガブガブと飲み干す様子を見とめて見ず知らずの男が気軽に話しかけてきた。

「ようにいちゃん、よい飲みっぷりだねえ」

余程美味そうに見えたのだろっ、自分にも同じものを注文している。後悔しなければよいが……。

「おうよ！ようやく仕事が終わってな」

シャーは陽気に答えてにんまりと笑った。

「へっへ、そいつめ良かった。ところでよう、にいちゃん」

男はどうやら街から町へと行商して歩く旅人らしく、シャーの顔も知らないようだ。屈託ない笑顔を振りまきながら、テーブルの対面に腰を落着けた。

「聞いたかい、今回の大スキャンダル」

「ほう、なんだい？」

興味津々と言った顔で、シャーはつまみの干し魚を齧った。

「なんとかという町の大貴族が、密輸やら人身売買やらで、とっ捕まわったって話じゃあねえか」

「おうよ、よく知ってるぜ。なんでも中央への賄賂も物凄かったらしいな」

内心ではしてやったりとほくそ笑みながら、それらしく眉根を寄せて頷いてみせる。

「その貴族、領地没収の上三十年の投獄だよ」

「ああ、国中その話題でもちきりさ」

「なんでも、先の大戦の勇者がまたぞろ活躍したとかしないとか」

「へえ、そうなんだ」

ひとしきり話し終えると、このニュースをまだ知らないものはいないかと、行商人は席を立っていった。

苦労した甲斐があったと、シャーは心の中で乾杯を繰り返しながら、剣を突きつけられたときのゾライアの間抜け面を思い出していた。

三十年の投獄とは事実上の終身刑だが、命あつてのものだねだろっ。上手くすれば存命中に恩赦もあるかもしれない。

少しやりすぎたかなと思う面もあるが、自分を騙そうとした罪は

重い。この際、メイラルフェイにはすっぱりゾライア家とは縁を切
って欲しかったのだ。

もうその名前は捨てているだろうけれど。

給仕の娘がテーブルの横を通りかかった。

「お嬢さん、どう？一緒に飲みませんか？」

素早く頭を現実に取り替え、にこやかに声を掛けるシャー。

「あらシャーさん、お久し振りね」

振り向いたその顔は、誰かに似ていた。

その娘がメイラルフェイと似ていることを思い出したのは、夜も
更けてベッドの中だった。

4 (後書き)

ここまで読んでくださりありがとうございました♪

シャアのプレイヤーは、現在も時々2・0の方でGMやったりしているみたいです。私も参加したいところですが、体が空きませぬ。無念。もう20年近くプレイしてない・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4974t/>

月下美人

2011年5月26日10時10分発行